



心理・社会福祉学科の佐藤安子教授が コロナ禍で奮闘する福祉専門職のストレスを分析

ストレス反応と、その自己統制について研究している武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科の佐藤安子教授らが、コロナ禍で心身に高いストレスを受けていると指摘される福祉専門職について、アンケートを実施。コロナ禍の前後で、ストレスをどのようにコントロールしているかをアンケートをもとに分析し、論文にまとめました。コロナ禍で心身に高いストレスを受けながらもやりがいと誇りをもって職務を全うしようとする福祉専門職の姿が見えてきました。

武庫川女子大学人間学研究第34号に論文「COVID-19感染症拡大下の福祉専門職のストレス反応の制御特徴—性別の観点からの検討—」として掲載されています。

アンケートは二つの方法で実施しました。まず、2020年10月～11月にかけて、九州の知的障害者支援施設30施設に在職する200人を対象に無記名郵送調査を行い、回答を得た43人について分析しました。また、近畿の知的障害者支援施設に在職する47人、近畿の社会福祉協議会に在職する30人に対し、オンラインや対面でアンケートに答えてもらい、回答のあった男性35人、女性33人について分析しました。

ストレス反応を自己統制するリソース量を測定する尺度として「ストレス自己統制評定尺度：SSI」を使用。ソーシャルサポート、自己充足的達成動機、心理的脆弱性など11因子70項目で、「全くない」から「非常にある」まで5段階で回答を求めました。また、Millerによる心理的対処スタイルを測定する尺度（MBSS）でストレス認知の仕方をチェック。日本版POMS2の尺度で直近一週間の気分状態を測定。これら3つの尺度でストレス因子を分析しました。

その結果、自覚的ストレス度では、コロナ禍後は男女とも、ネガティブ気分が高まっており、ストレスが高まったことがわかりました。特に女性で疲労・無気力が目立ちました。ただ、コロナ禍であふれたネガティブな情報の影響については、男女とも見聞きしていたものの、それによってストレスが増幅することはなく、意思決定や仕事への影響はみられませんでした。

ストレス反応を自己統制するためのリソース量については男女で差がみられました。女性は友人や職場の仲間と助け合う「ソーシャルサポート」や気晴らしをする「情動対処」などでストレスをコントロールする傾向が強く、男性は「運動の有能感」がストレス対処に重要であることがわかりました。男性では「落ち込み」などメンタルの弱さが顕在化した時にストレスがコントロールしづらい状況になる傾向がみられることから、「仕事のやりがいや誇りと体調管理の間に葛藤が生じている」と分析。一方、女性は体調が悪くてもますます仕事を抱え込む傾向がみられ、身体的な弱さが顕在化したときにバーンアウトするリスクを指摘しています。

この結果から佐藤教授は「コロナ禍では、女性の自殺が増えていることも指摘されています。福祉専門職はぎりぎりのところで持ちこたえている状態ですが、ほかの職種も似た状況と推測されます。今後はこうした人たちをエンパワーできるような調査・サポート一体型の実践に発展できるよう、さらに研究を進めます」と話しています。

この件に関するお問い合わせは 広報室
Tel 0798-45-3533
メール kohos@mukogawa-u.ac.jp お願いします。



佐藤安子教授